

P-211 子宮内膜症病変におけるホルモンレセプターの免疫組織化学的検討

太田西ノ内病院

田村みどり, 清水孝郎, 高野忠夫, 田中幹夫,  
渡辺英子

[目的] 子宮内膜症の薬物療法のうち、近年当院でもDanazolの全身投与例はGn-RH analogueに替わられ減少しているが、Danazolをはじめとし薬物の局所投与の有効性を検討するため、子宮内膜症及びその周辺組織での androgen receptor (AR)の局在をestrogen receptor (ER)、progesterone receptor (PR)と併せて検討した。

[方法] 当院で手術療法が行われた子宮内膜症例のうち、チョコレート嚢胞5例、子宮腺筋症10例の計15例の手術標本を患者の同意を得て、免疫組織化学的検討を行った。臨床病歴と子宮内膜日付診から月経周期を確認した。一次抗体には全てモノクロナル抗体である抗ER抗体 (Daco, M7047)、抗PR抗体 (Daco, A0098)、抗AR抗体

(Novocastra, NCR-AR-2F12)を用いた。ホルマリン固定パラフィン包埋切片をオートクレーブ加熱処理し、ABC法を用いて免疫染色を行った。ARに関しては前立腺手術標本を患者の同意を得て陽性コントロールとした。

[成績] 月経周期を確認しえた例では増殖期6例、分泌期6例あり、いずれの例でも子宮内膜症病変の腺及び周囲の間質で細胞核にER、PRとも陽性であったが、ARについては核に有意の染色性を示した例は認められなかった。

[結論] 今回の検討から、子宮内膜症の腺細胞及び病変周囲の間質細胞にはAR蛋白は発現していないか、微量で検出できないかまたは速やかに移動または消失している可能性が示唆された。

P-212 子宮内膜関連蛋白を用いた子宮内膜の機能解析

東京医大

臼田三郎, 伊東宏絵, 藤東淳也, 西 洋孝,  
鈴木良知, 舟山 仁, 井坂恵一, 高山雅臣

[目的]子宮内膜の機能を解析する試みとして、子宮内膜に局在あるいは関連すると報告されている各種蛋白を用いて、正常および子宮内膜症患者における子宮内膜の月経周期による変化について比較検討した。[方法]対象は患者の承諾を得て採取した摘出子宮内膜および生検による子宮内膜66例で、このうち子宮内膜症患者は36例である。免疫組織学的検討は、連続した凍結切片を作成し、冷アセトン固定後、ABC法にて行った。使用した抗体は18種類であり、各染色の詳細な比較検討は、H-SCOREを用いた。[成績] CA125は子宮内膜腺細胞(EM-G)のみに特異的な染色性を示した。また胎盤組織蛋白PP26は月経周期に関係なくEM-Gおよび子宮内膜間質細胞(EM-S)に局在を認めたが、常にEM-G優位であった。ERとPRの染色は、EM-G優位で増殖期後期から分泌期前期に強い染色を示し、その後減弱した。LIFは、EM-Gに局在を認めたが、月経周期における一定の傾向は認められなかった。BCL-2の染色は、増殖期のEM-Gに強く認められ、分泌期では減弱した。Integrin  $\alpha 1$ はEM-Sには染色されずEM-Gに著明な染色を認めた。Integrin  $\beta 1$ はEM-G優位、Integrin  $\beta 3$ は同等の染色性を示すが、排卵期周辺で減弱した。Integrin  $\beta 5$ はEM-G優位であり、核に強い染色を認めた。Integrin  $\alpha v \beta 3$ はEM-G優位であったが、月経周期における特異性はなかった。[結論] 各種子宮内膜関連蛋白は、月経周期において各々特徴的な染色性を示したが、正常内膜と子宮内膜症内膜の間に有意な染色性の差は認められなかった。